７　アパルトヘイトへの抵抗

アパルトヘイトに対する国連特別委員会

南アフリカ共和国

国を統治する側は、その国民すべてに対して最善と思われる方法をもって国を統治し、国を形成するさまざまな人々の利権の均衡を保たねばならない。多くの政府がその一部の国民に、そして集団や個人を、有力な人間が彼らを虐げることを防ごうとしなかったり、政府そのものが影でそのようなことをしたりして、差別や不義で苦しませている。南アフリカ共和国は、多数派と呼ばれる人々を拡大することで少数の人間ばかりが益をこうむるように、その政府が慎重に、そして組織的に形成した他に類を見ない国であった。人々が属すグループというものは、ただひとつのものだけで決定されていた。肌の色である――ヨーロッパ系、アフリカ系（人種の入り混じったもの）、またはアジア系であった。これはアパルトヘイト、または人種強制分離と呼ばれた。

南アフリカ共和国、または一部の人が呼ぶところのアザニアでは、さまざまな民族と人種が古くから入り混じってきた国である。いくつかのアフリカの先住民族がそこに住んでいたが、なかでもとりわけ多かったのはコーサ人とズールー人であった。ヨーロッパ人が17世紀ごろオランダ人を筆頭にして、そこに入植しはじめた。次いで18世紀末にはイギリス人が、19世紀にはドイツ人が、といった具合である。その他の民族はヨーロッパの他の地域や西アフリカ、東南アジア、とくにインドから労働者として渡ってきたり連行されてきたりした。黒人差別や人種差別がそのとき既にあったかもしれないが、政府は1948年、一部のヨーロッパの白人に、むりやり差別を国の方針として認めさせられた。それは法令としてまかり通り、人々の生活のあらゆる部分を支配した。自分と異なる人種の者とは結婚してはいけない、居住する場所の選択が許されない、旅行するにも好きな場所には行けない、などである。人口の14％にあたる白人たちは国土の87％を特別に割り当てられた。それは最も肥沃な場所で、世界でも最も高い部類に入る生活水準をその白人たちは謳歌できたのである――というのも、南アフリカ共和国は金とダイアモンドに恵まれており、さらには黒人（白人でない者）は白人に尽くすように強制されていたからである。

アフリカ人たちはなによりも「ホームランド」と呼ばれる、独立した国のように見せかけた、不毛で、かつ充分な食物も供給できない場所に住まわされたことに苦しんだ。しかし、白人でない者たちはみな自由が認められないことに苦しんだのである。彼らには公的には力など認められておらず、充分な教育も雇用の機会もなかったのである。すべての国の機関は巨大な軍隊によって操られ、警察はアパルトヘイトを助長するように強制されていた――人を守り、助けるのではなく。

アパルトヘイトに対する闘争

南アフリカやその他の国々に住む全人種の多数の人々が、またある人々は命をかけて、アパルトヘイトは悪いことと考え、抵抗した。いくつかの抵抗運動が起き、その中でも最大のものは、アフリカ民族会議であった。抵抗のリーダーたちはしばしば投獄された。組織と対立するために、国連を通じて世界中の国家が協力した。しかし、彼らは軍事的手段を用いることは望まなかった。彼らは制裁手段をとった。それは、ある国を他の世界から孤立させることによって、その政府に政策を再考させる方法のことであり、いくつかの国によって、外交関係は絶たれ、貿易と兵器の禁輸が課された。

苦闘の年月は 1990 年に成果をあげた。当時の大統領 F W de Klerk はアフリカ民族会議のリーダーであるネルソン・マンデラを刑務所から釈放した。アパルトヘイトを撤廃する一番最高の平和的な方法と、協力しあう新しい南アフリカを創立することが決められた。国連の援助もあり、彼らは４年をかけて、全人種の人々が自らの政府を選ぶ選挙の準備をした。国際的な監視者に加えて、それらの中で最大の、南アフリカの国連の監視団員の派遣団は、選挙が円滑に、また公平に実施されているか、確かめるために、それを監視した。1994 年 4 月に、全人種の南アフリカ人は歴史上初めて共に投票し、ネルソン・マンデラが、人種の違いに基づかない南アフリカの最初の大統領として選ばれた。また、新しい議会も同様に、主な政党の議員によって選ばれた。

未来

現在の南アフリカ共和国にはまだおおきな問題が残っている。国土には豊富な資源があるものの、それらはアパルトヘイト社会では公平に分配されることがなかった。黒人の大部分がその不平等のために苦しんだ。失業、劣悪な住宅事情、さらに電力や医療などの必要最低限のサービスの不足などであった。アパルトヘイトの廃止とともに、これらの人々は当然のことながら普通の生活が送れることを期待した。新しい政府は他の人々の権利や財産を放棄することなくその願いを聞き入れようとした。それはまた、過去の殺戮や暴力や不信などが再び繰り返されないための和解の風潮を作り出そうという意欲の現われでもあった。いまだに白人でも黒人でも多くの人々は過去、南アフリカ共和国の警官隊と市民のあいだの「戦争」という逸脱した行為への処罰を求めていた。政府の解決策は「国民に誠実な委員会」を設立することであった。それは、人々に和解と平和を手にするまえになにが生じ、だれに責任があるのかを知ってもらうための機関であった。

国連事実ファイル：国際連合：アパルトヘイトに対する特別委員会

1946　インドは最初に、総会で南アフリカにおける人種差別の問題を提起した。

1960　警察によって 56 人のアフリカ人が殺されたシャープヴィルでの大虐殺により、南アフリカに、その人種政策をやめるよう求める 134 の国連安全保障理事会の決議がなされた。

1962　国連はアパルトヘイトに対する特別委員会をつくったので、その状況は継続的調査の下に置かれることになった。

1963　安全保障理事会は南アフリカに対し、義勇軍の禁止を命じた。

1964　南アフリカに対する国連の信託基金が、国外追放から自由にされなければならない多くの人々を含め、アパルトヘイトの犠牲者たちを救うためにつくられた。

1968　総会が、文化とスポーツの排斥を課したので、エンターテイナー、役者、スポーツマンなどは南アフリカで演じられなくなった。この国はすでに、1964 年にオリンピックから締め出されていた。

1974　南アフリカに対する戦闘の禁止により、委任統治国が設けられ、総会におけるこの国家の会員権は停止させられた。

1992　安全保障理事会は、報告のための特別な代表者と、南アフリカ政府が受け入れた、権限を授与する国連の監視団員を設置するという二つの決議(765 と 772)をした。

1994　国連と他の多くの国際的な組織は、全ての人が自由に投票できることを確実にするために、選挙を観察した。1994 年 6 月 23 日に、南アフリカは総会の中で再びその立場を得、そしてアパルトヘイトに対する特別委員会はその役目を終えて、閉じられた。

私たち南アフリカの人々は、南アフリカに住む人は黒人も白人も全員、南アフリカに属し　　そしてすべての人々の意思に基づかない限り、政府は正しく権力を主張することはできず、　　人々は不当や不平等に基づいた政府の形態によって、土地、自由、平和という生得権を奪われた。私たちの国は、全員が人類愛、平等な権利や機会を享受する中で生活をするまで、決して繁栄や自由にはなれないだろう。すべての人々の意志に基づいた民主国家だけが、皮膚の色や人種、性別、信念の差別なしに生得権を手に入れることができるということを知るため、すべての私たちの国や世界に対して、表明する。そして、それゆえに、私たち、南アフリカの人々は、黒人も白人も共に、同国人や同志は、平等な、この憲章を採択する。

自由憲章への導入１９９５

昔のアパルトヘイトの旗（青、白そしてオレンジ）は上記のような現在の旗に変わった。これは新しい南アフリカ共和国を意味する。古い旗は１９９４年4月２６日をもって廃止された。

活動

１．世界の国々が南アフリカに対して、アパルトヘイトに屈さずに戦争をするべきだと考える人、制裁だけをすべきだと考える人との二人でロールプレイ（又はディベート）をしなさい。各々のメリットとデメリットは何か？どのような制裁があなたの学校や地域で人々の行為を良くするために使われていたかを、話し合いなさい。行為を良くするため、罰と奨励のどちらがいいのか？

２．多くの白人たちは、彼らもまたアパルトヘイトの終わりによって解放されたと言っている。どの点でそれは真実だと言えるのか？

３．多くの宗教は、人々は神の目の中で平等であり、お互い公平に行動し、お互いを愛し（慈悲深い)、共通の神に対して根気強く働き、お互いに信頼すべきだと教えている。どの点でアパルトヘイトはこれらの価値に損害を与えたのか？

４．なぜ南アフリカは新しい国旗を必要としたのだろうか？この新しい国旗は国民のために何を象徴しているのか？

あなたは人と問題を起こしたとき、普通真相を突き止めようとするか、問題をわきへ置いて新たに出発しようとするか？

コメント／問題提起

本文中にも書かれていたように、1994 年 4 月に全人種が参加する選挙が行われ、5 月にネルソン・マンデラが大統領となり、新政権が樹立された。マンデラは民族和解・強調を呼びかけ、アパルトヘイト体制下での白人・黒人との対立や格差の是正、黒人間の対立の解消、経済制裁による経済不況からの回復に努めた。その対策として、公共事業を通じて失業問題を解消させ、土地改革によって不平等な土地配分を解決し、5 年間に毎年 30 万戸以上を建設することで住宅問題の解決を図り、上下水道などの衛生施設の完備をし、2000 年までに 250 万世帯を電化するといった計画を発表した。しかし、その計画は実施機構整備の遅れ、財源不足、人材不足から達成するにいたらなかった。特に黒人への富の再配分の実施は遅れ、失業は増大し、また、ほとんどの黒人は旧黒人居住区から離れることができずに貧しさの中で希望を失い、社会犯罪は激化した。このことが先進諸国からの投資や、企業進出を妨げる要因となっている。このような状況から黒人の新政権への不満が高まることになった。その後、ターボ・ムベキが新大統領に就任した後も状況は変わらず、失業率は 3 割を超え、犯罪率も高く、またエイズが蔓延している。アパルトヘイトによる傷から今だ、南アフリカ共和国は立ち直っていないと言える。

さらに、もう一つの点として、アパルトヘイトに対する日本政府の対応にも問題があった。確かに日本政府は、公式見解としては南アフリカ政府のアパルトヘイト政策に強く反対している。しかし、実際に行われていることを見る限り、むしろ反対の政策をとっていると言わざるを得ない。例えば、パリのユネスコ本部で開催された国際会議の席上で、南アフリカのアパルトヘイト政策に対し軽蔑を持っていた各国代表は、南アフリカの外相が壇上に上がると、それに抗議して席を立ち会場を出てしまった。それにもかかわらず、見本政府の代表は席に座り続けていた。ここに日本政府の南アフリカ政府に対する態度がよく現れている。さらに、1987 年には、日本が南アフリカ最大の貿易国になったことはスキャンダラスな事実として大きく報道されたが、それに先立つ 85 年に南アフリカの経済状態が公然化したときに、日本は南アフリカからの輸入を急増させ、南アフリカの外貨獲得に多大の貢献を果たした。これは南アフリカのアパルトヘイト体制を支える“経済援助”となり、また、各国の経済制裁の効果を弱めることになった。別の点として、とうもろこし、砂糖、えび、パルプなど、日本市場には南アフリカ製品があふれている。つまり、一般消費者もアパルトヘイトを続ける国との貿易構造に組み込まれていたのである。これらのことから、アパルトヘイトは、国家規模の問題というだけでなく、私達個人にも関わることとして、考えなければならないことと言えるのではないだろうか、と考えた。

参照資料：http://ja.wikipedia.org/wiki/
http://www.geocities.jp/s_fukio/novelessay/essay6.html

報告者：江口踊、坂口史、高比良香織